武蔵野日曜聖書講筵

わが中に有るものを汝に与う

――使徒行伝第３章――

１９９１年４月７日
小池辰雄

我を見よ　罪の始末　無的実存　霊生の発現　平伏して転身せよ　万物更新　霊的な裔

【使徒３】

1昼の三時、いのりの時にペテロとヨハネと宮に上りしが、2ここに生まれながらの跛者(あしなえ)かかれて来(きた)る。宮に入る人より施済(ほどこし)を乞うために日々宮の美麗(うつくし)という門に置かるるなり。3ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見て施済を乞いたれば、4ペテロ、ヨハネと共に目を注(と)めて『我らを見よ』と言う。5かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、6ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』。7すなわち右の手を執りて起こしに、足の甲と踝骨(くるぶし)とたちどころに強くなりて、8躍り立ち、歩み出して、且あゆみ且おどり、神を讃美しつつ彼らと共に宮に入れり。9民みなその歩み、また神を讃美するを見て、10彼が前に乞食にて宮の美麗門(うつくしもん)に坐しいたるを知れば、この起こりし事に就きて驚駭(おどろき)と奇異(あやしみ)とに充ちたり。

11斯て彼がペテロとヨハネとに取りすがり居るほどに、民みな甚だしく驚きてソロモンの廊と称うる廊に馳せつどう。12ペテロこれを見て民に答う『イスラエルの人々よ、何ぞ此の事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力(ちから)と敬虔(けいけん)とによりて此の人を歩ませしごとく、我らを見つむるか。13アブラハム、イサク、ヤコブの神、われらの先祖の神は、その僕イエスに栄光をあらしめ給えり。汝等このイエスを付し、ピラトの之を釋(ゆる)さんと定めしを、其の前にて否みたり。14汝らは、この聖者・義人を否みて、殺人者を釋さんことを求め、15生命の君を殺したれど、神はこれを死人の中より甦えらせ給えり、我らは其の証人なり。16斯てその御名を信ずるに因りてその御名は、汝らの見るところ識るところの此の人を健(つよ)くしたり。イエスによる信仰は汝等のもろもろの前にて斯る全癒を得させたり。17兄弟よ、われ知る、汝らが、かの事を為しは知らぬに因りてなり。汝らの司たちも亦然り。18然れど神は凡ての預言者の口をもてキリストの苦難を受くべきことを預(あらか)じめ告げ給いしを、斯くは成就し給いし

なり。19然れば汝ら罪を消されん為に悔改めて心を転ぜよ。20これ主の御前より慰安（なぐさめ）の時きたり、汝らの為に預（あらか）じめ定め給えるキリスト・イエスを遣し給わんとてなり。21古（いにし）えより神が、その聖なる預言者の口によりて、語り給いし万物の革（あらた）まる時まで、天は必ずイエスを受けおくべし。22モーセ云えらく、「主なる神は汝らの兄弟の中より我がごとき預言者を起こし給わん。その語る所のことは汝等ことごとく聴くべし。23凡てこの預言者に聴かぬ者は民の中より滅し尽くさるべし」24又サムエル以来かたりし預言者もこの時につきて宣伝（のべつた）えたり。25汝らは預言者たちの子孫なり、又なんじらの先祖たちに神の立て給いし契約の子孫なり、即ち神アブラハムに告げ給わく「なんじの裔（すえ）によりて地の諸族はみな祝福せらるべし」。26神はその僕を甦えらせ、まず汝らに遣し給えり、これ汝ら各人を、その罪より呼びかえして祝福せん為なり』

●我を見よ

これは著作集第十巻『聖霊は大ドラマである』の11月9日の所（「キリストの無者ペテロ」）に出ています。「美麗門（うつくしもん）」、「美しい」とはギリシャ語で「ホーライアン」という。ペテロが、

「我を見よ。お金はないよ」

と言う。「君子もとより窮す」という言葉がある。「君子」とは道徳的に自分を修養している人。それは元来、貧乏であるという。

「金銀はない。けれども、私に有るものをお前に与える」

ここが素晴らしいところです。直訳すると、

「私が持っているものを、それをお前に与える。ナザレのイエス・キリストの名に在って歩め」

「名の中で」という言い方です。「エン」ですから。ペテロが、そう発したら、そして手を取ったら、たちどころに立ち上がったというのだから、完全に本当の聖霊の現実です。大変なもんです、これは。

「足の甲と踝骨（くるぶし）とたちどころに強くなりて、躍り上がってしまった」

と。福音書でキリストと一緒にいたペテロは、こんな力は持っていなかった。キリストと地上で一緒にいても。

●罪の始末

キリストの言われた、

「我に受くべきバプテスマあり」

とは十字架のこと、

「十字架を通ったらお前たちに火を与える」

とは聖霊のこと。ルカ伝12章49、50節の有名なところ、非常に大事な言葉です。

「十字架に懸かってお前たちの贖罪をするまでは、聖霊は与えないんだ」

ということですから。地上ではダメなんです。まだ罪の始末がついてないから。

我々は現実には罪びとだけれども、罪の始末はついている。過去・現在・未来の人間小池は、贖われ切っているから、

「相対的な人間小池がどうだ」

と、そんなことは問題でない。その奥の世界にはっきりと、私は、無罪、罪の無い世界を賜っている。だから、私は「無」と言っている。

「無者」

というのは、キリストは自分を何者ともしなかった無者で、我々は罪から贖われた無罪者なんだ。そこを本当に受けとってごらん、もう必ず聖霊の力が来るから。

ペテロはこれをはっきりやって、たちどころに生まれつきの跛者が立ってしまったというのだから、大変なことだ。大変な現実です。我々は同じ質を持たなかったならば――何も、病を治すことが問題じゃありませんけれども――いくら聖書を研究したってダメです。ところが、正直、我々にはその力が来ているから、皆さんは非常に若々しくて元気なわけだ。

●無的実存

「躍り立ち、歩み出して、且(かつ)あゆみ且おどり」

と、非常にはっきり見るように書いてある。「神を讃美しつつ彼らと共に宮に入れり」、民は皆驚いた。

11 **斯(かく)て彼がペテロとヨハネとに取りすがり居るほどに、民みな甚だしく驚きてソロモンの廊と称うる廊に馳せつどう。** 12 **ペテロこれを見て民に答う『イスラエルの人々よ、何ぞ此の事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力(ちから)と敬虔(けいけん)とによりて此の人を歩ませしごとく、我らを見つむるか。** 13 **アブラハム、イサク、ヤコブの神、われらの先祖の神は、その僕イエスに栄光をあらしめ給えり。**

「私たちの側の偉さでも、信仰の強さでも、そんなことではないんだ」

と。この言葉は本当に素晴らしい。いわゆる「敬虔(けいけん)」を非常に問題にするんだ、カトリックあたりでも。ところが、「敬虔」、我々の「信仰」も問題にしない。私がいた無教会でも、

「信仰、信仰」

と言っている。信仰がサムシングになってしまっている。我々の側の信仰なんか、サムシングにしたってダメだ。そうしたら、信念になってしまう。いわゆる信念として考えたって、そんなものはダメだ。ゼロになるんだ。だから、いつも言っているとおり、

「何もありません、私の側の信仰もありません。あるのは、十字架で完全に無にされたこの世界です」

と。そうすると、十字架されたら、無限大な――「無限大」というのは「聖霊」のことだから――聖霊が来るというわけだ。これが、「十字架・聖霊」だ。これが我々の現実の徴です。だから、ガンバル必要がない。上から力が来るからね、圧倒される力が。人間的なガンバリの必要はない。その代わり、キリストに自分を投げかけるわけです。あるいは、ぶっ倒れるわけです。そうすると、キリストの腕の中だから、こんな有難いことはないでしょうが。無条件な世界です。これを

「無的実存」

という。だから、

「何だって私を見るか、私を神さまのように、冗談じゃない」

と。「我らを見よ」と言ったさっきのペテロと、言葉が矛盾するじゃないかと。そうですよ。「我らを見よ」というのは、

「我らのうちなるキリストを見よ」

ということ。今度は、

「我々の人間ペテロを見たって、何にもならんぞ。跛者が立ったのはイエスの栄光が現れたんだ。キリストの力だ、私の力ではないよ」

と。ペテロのこの二つの言葉は矛盾したようで、実は矛盾していない。

「なぜ私を見るか、もし見るなら、私の中のキリストを見てくれ」

と、これだけのはなし。

●霊生の発現

汝等このイエスを付し、ピラトの之を釋さんと定めしを、其の前にて否みたり。

14 **汝らは、この聖者・義人を否みて、殺人者を釋さんことを求め、**15 **生命の君を殺したれど、神はこれを死人の中より甦えらせ給えり、我らは其の証人なり。**

キリストは甦らざるを得ない人です。あれでキリストが甦らなかったら、十字架だけでおしまいになったら、これはもう、罪の贖いも何もありはしない。罪を贖うだけの力のある人は、甦らざるを得ない。甦りというのは、

「土の体あり、霊の体あり」

という、霊生、霊の生命ですからね、聖霊の生命だから。霊生が発現したんだ。これが、ルカ伝に書いてあるとおり、

「私は幽霊じゃないぞ、何か食べるものがあれば食べてみせるぞ」

と。お魚を食べたでしょ、キリストは。これは大変な現実です、誰が考えたって。おとぎ話なら書くかも知れないけれども、宗教物語じゃないんだ。これは現実なんだ。こういうことに、本当に降参するまでは、御霊の凄い世界には入れない。ところが、普通の牧師も

「まあ聖書に書いてあるから仕方がない」

くらいのところだ。これを神学者なんかは相手にしないよ。これを宗教物語にしてしまう。それは、お釈迦さまがどんなにすごくても、キリストは桁違いですから。もうキリストを瞑想すると、私は本当にぶっ倒れる。もの凄く圧倒される。異言が出そうになって困る。

「ペテロさん、もう本当に全く然りアーメンですよ」

と。しかも「証人である」ということは、ただ口先で証人じゃない。自分たちの中に、キリストと同じ力が、同質の生命が来ているから。

16斯(かく)てその御名を信ずるに因りてその御名は、汝らの見るところ識るところの此の人を健(つよ)くしたり。イエスによる信仰は汝等のもろもろの前にて斯(かか)る全癒を得させたり。

「御名の力」というのは、魔法じゃない。御名を呼ぶと、自分がその御名の中に入ってしまう。だから、その人を通してそこで働く。御名と一つにならなければ、「御名の力」と言ったってしょうがない。だから

「イエス・キリストの名に在りて歩め」

と言った時に、その言葉自身の中にもうペテロは入ってしまっているから、そのペテロを通して力が働く。キリストの本願の響きがペテロの言葉の中に来ているわけです。

●平伏して転身せよ

17兄弟よ、われ知る、汝らが、かの事を為しし(つかさ)は知らぬに因りてなり。汝らの司たちも亦然り。

みんな分かっていない。この「知る」というのは、体験で体得していることが、「知る」ということで、頭で知ることではない。

18然れど神は凡ての預言者の口をもてキリストの苦難を受くべきことを預(あらか)じめ告げ給いしを、斯(か)くは成就し給いしなり。19然れば汝ら罪を消されん為に悔改めて心を転ぜよ。

「苦難」とは十字架のこと。「悔改めて心を転ぜよ」とは、転心せよ――転身せよ――全存在をめぐらせ、ということ。心だけじゃない。転身だ。だから、信仰は行動的。これははっきり宗教改革をしなければダメなんです。「信仰、信仰」と言ってね、ただ心理的な、心の動きばっかり考えている。そうじゃない。全存在だから、「身(からだ)」、「転身」と書いた方がいい。

「罪を消されんため」とは、我執というものがすっ飛んでしまうために、

「悪かったと平伏して全身を転ぜよ」

ということ。「悔い改めて」というが、自分で改められはしません。この「悔い改め」という言葉が躓きになって困る。「悔いて改める」といって、自分で改めたって何もならん。改めるのは向こうからの力によって改まるので自分で「改め」なんかできない。「悔いる」だけならいい、「申し訳ない」と。「悔いて」というのはむしろ「平伏して」と言った方がいい。

「平伏して転身せよ」

と。そういうようにはっきり訳したいね、私は。

20 **これ主の御前より慰安（なぐさめ）の時きたり、汝らの為に預（あらか）じめ定め給えるキリスト・イエスを遣（つかわ）し給わんとてなり。**

「慰安の時」。「なぐさめ」という言葉はよく出てくる。一番出て来るのは、コリント後書の第1章。「慰め、慰め」とたくさん出てくる。慰めのもとは恵みなんです。恵みを受けることが本当の慰めになる。恵みとは何ですか。「恵み」、「カリス」は、要するに

「十字架と聖霊」

なんです。これが「恵み」です。これを受けると、「慰められる」どころじゃない、力が来てしまう。喜びが来てしまう。

●万物更新

21 **古（いにし）えより神が、その聖なる預言者の口によりて、語り給いし万物の革（あらた）まる時まで、天は必ずイエスを受けおくべし。**22 **モーセ云えらく、「主なる神は汝らの兄弟の中より我がごとき預言者を起こし給わん。その語る所のことは汝等にことごとく聴くべし。**23 **凡てこの預言者に聴かぬ者は民の中より滅し尽くさるべし」**

凄いことを言っているね、

「万物の革（あらた）まる時」

と。万物更新だから、これは大変だ。世の終りだ。「我がごとき」どころじゃない、「我よりはるかに凄い」。もちろん、まだモーセには分かってないけれども。ところが、この預言者キリスト、この大預言者、超預言者、これをユダヤ人は受けとらないんだ。あいかわらず、「モーセ、モーセ」と言って、「キリスト」とは言わない。困ったもんだね、ユダヤ人は、「モーセの律法」ばっかりで。モーセの律法よりもキリストの山上の大告白の方が上ですから。

手島さんの大グループは、しょっちゅう巡礼のようにイスラエルに行っているけれども、イスラエルの人と楽しくやっているようだけれども、

「あなた方はなぜキリストを受けないのか」

と、誰か本当に言っているのかね。おそらく、言わないでしょう。

「なぜキリストを受けないのか」

と、はっきり言わなければダメなんだ、本当は。そこに手島さんの限界もあったけれどもね。キリストを拒んでいたところの、パリサイの最たる者がサウロ、これがあのように見事にひっくり返されて、本当にキリストの第一番の弟子となったでしょ。

「我は罪びとの首（かしら）」

と言ったパウロは最大の弟子になった。さっきの内村鑑三もそう言った。

「私みたいのが救われたから、誰でもが救われる」

と、万人救済論をその後で書いた。とにかく、内村先生というのは凄い魂です。私が、第三の罪びとの首だ。これが何をするか。最後に一巻の詩を書いてサヨナラするから。

●霊的な裔

この福音を受けたら、いい加減なことで死ぬわけにいかん。あなた方お一人お一人も、それぞれ大事な使命を帯びていますよ。それぞれの世界で、人がどう思うと、神さまにキリストに本当に喜ばれる凱歌を上げて、お互いに天界に行きましょう。数なんてどうでもいい。

「千万人といえども我ゆかん」

と孔子が言ったけれどもね。フランスでも、ジャンヌ・ダルクなんてのは、女性だけれども、あれだけの仕事をした。最後には火炙(あぶ)りにかかって、大変なことだったけれども。ひどいことをするね、あれ。

24又サムエル以来かたりし預言者もこの時につきて宣伝(のべつた)えたり。25汝らは預言者たちの子孫なり、又なんじらの先祖たちに神の立て給いし契約の子孫なり、

約束されている。けれども、ただ血統でもって言うんじゃない。血統的にアブラハムの子孫だからといって、いい気になっていたら、

「そんなのは皆ダメだ」

とキリストが言っているんだから。

「かえって異邦人の方が先に行ってしまうぞ」

と。ああいうことをはっきり、キリストが言われるものだから、いよいよ、皆に憎まれたんだけれども。

「我が名のゆえに、お前は憎まれるぞ」

と、キリストはまたそう言っている。

「すべての人に憎まれん、されど終りまで耐え忍べ」

と。烈しいです。

即ち神アブラハムに告げ給わく「なんじの裔(すえ)によりて地の諸族はみな祝福せらるべし」。26神はその僕を甦えらせ、まず汝らに遣し給えり、これ汝ら各人を、その罪より呼びかえして祝福せん為なり』

本当の裔(すえ)です、霊的な裔です。

「お前たちを通して、我々を通して、いよいよ神の国が広まるためなり」

なんです、本当は。ペテロの言葉も、少しもどかしくなるくらいだ。しかし使徒行伝では、ペテロ、パウロは本当の証者となって、これは大変なもんです。ピリポなんて凄いのも居たけれどもね。